

学籍番号：4318100389

氏名：平塚 慧

実習先：小宝島・宝島

実習期間：令和5年6月19日～6月25日

1. 自然環境

○宝島

トカラ列島の有人島では最南端の島で、隆起した珊瑚礁でできたハート形をした島である。その名のとおり、昔イギリスの海賊、キャプテンキッドが財宝を隠したという言い伝えがあり、財宝を隠したという鍾乳洞もある。実際に国内外から多くの探検家や賞金稼ぎが訪れたといわれ、歴史的にみても、宝物というというネーミングにふさわしいロマン溢れる海に囲まれている。また珊瑚礁に囲まれた海のエメラルドグリーンと白い砂浜のコントラストが美しい島である。

面積は7.14 km²、周囲は13.77kmである。空港はないため、週2便運行している村営のフェリーとしま2を利用し鹿児島から約13時間(鹿児島港からは366 km)、奄美大島から2時間半(奄美大島からは90km)かけてのみ訪れることが可能である。集落は島の北岸の斜面にあり、港から山に向かう坂に民宿や郵便局、コミュニティセンターなどが建ち並んでいる。

○小宝島

宝島の北東約16kmにある隆起サンゴ礁でできた周囲4kmの小さな島である。アダンやソテツが生い茂り、道路わきにはハイビスカスが咲き乱れている。一番高い山でも標高103mという平坦な島で、30分も歩けば島一周でき、海上から見ると妊婦さんのように見える。立神と呼ばれる多くの奇岩が海岸線にそびえ立ち幻想的な景観を織りなし、中でもウネ神、赤立神などは見ごたえがある。

面積は0.98 km²、周囲4.74kmである。宝島と同様、フェリーを利用してのみ訪れることができる。土地の利用状況は牧場、畑である。



・アダンの実



・ハイビスカス

2. 社会的背景

十島村は、戦後、アメリカ合衆国の施政下にあったが、1952年2月に日本へ復帰し、十島村として村政が敷かれるという歴史がある。また、奄美群島が1953年12月に日本に復帰する前後は奄美と鹿児島島の人的・物的経由地として賑わい、2,600人前後の人口があった。

1960年から1985年までは、中学校卒業とともに進学や就職で生徒が島を離れるという地域性に加え、わが国の急速な経済発展に伴い人口が流出し、大幅な人口減少が続いた。その後は、大型公共工事の動向に左右されつつも、2011年からは移住対策等が奏功し、増加傾向にある。(図1)

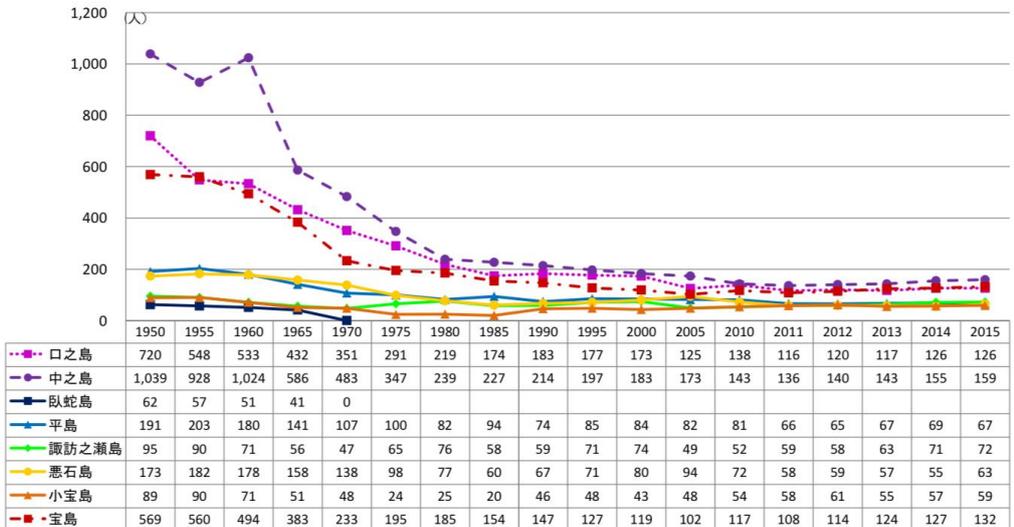


資料 総務省「国勢調査」、2011年から2015年は十島村「住民基本台帳」(各年5月1日現在)

(図1)人口の推移

2015年5月末時点の人口を島別にみると、中之島が159人で最も多く、次いで宝島132人、口之島126人、諏訪之瀬島72人、平島67人、悪石島67人、小宝島59人と続いている。

なお、臥蛇島は、児童・生徒が皆無となり、学校教職員の引き上げ等で急速に島の人口が減少し、1970年7月28日に島民全員が移住し、無人島になった。また、小宝島も同様の状況となり、1975年から1985年までは20人台の人口で推移していたが、児童の誕生と学校の復活が契機となり、現在は60人前後までに回復している。(図2)



(図2)島別の人口の長期推移(資料は図1に同じ)

2010年の産業分類別就業者数は351人で、村全体の人口の53.4%を占めている。島別には、宝島が71人で最も多く、次いで中之島66人、口之島56人と続いている。産業別には、農業が74人で最も多く、次いで教育・学習支援業(学校関係)66人、建設業60人、飲食店・宿泊業33人、漁業25人と続いている。(図3)

(単位:人、%)

	口之島	中之島	平島	諏訪之瀬島	悪石島	小宝島	宝島	十島村計			参考 2005年
								2010年	構成比	2005年比増減	
第1次産業	17	23	12	9	13	5	20	99	28.2	8	91
農業	14	17	6	7	11	3	16	74	21.1	3	71
林業	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0
漁業	3	6	6	2	2	2	4	25	7.1	5	20
第2次産業	13	8	9	4	10	10	19	73	20.8	▲21	94
鉱業	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0
建設業	13	8	8	4	10	7	10	60	17.1	▲28	88
製造業	0	0	1	0	0	3	9	13	3.7	7	6
第3次産業	26	35	22	21	21	22	32	179	51.0	22	157
電気・ガス・熱供給・水道業	3	4	3	3	3	3	3	22	6.3	6	16
情報・通信業	0	0	0	0	0	1	0	1	0.3	1	0
運輸業	0	0	0	1	0	1	2	4	1.1	1	3
卸売・小売業	4	5	1	1	1	0	3	15	4.3	6	9
金融・保険業	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0
不動産業	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0
飲食店・宿泊業	5	6	4	3	5	4	6	33	9.4	5	28
医療・福祉	1	1	1	1	1	1	4	10	2.8	3	7
教育・学習支援業	9	11	11	7	9	10	9	66	18.8	3	63
複合サービス事業	2	3	0	0	0	0	3	8	2.3	▲1	9
サービス業	0	2	1	1	1	0	0	5	1.4	▲5	10
公務	2	3	1	4	1	2	2	15	4.3	3	12
就業者総数	56	66	43	34	44	37	71	351	100.0	9	342

資料 公益財団法人日本離島センター「離島統計年報」

(図3) 産業分類別就業者数

3. 住民の生活

農業・畜産・漁業いずれにおいても自給自足のものが多い。農業においては日本で1955年の最後まで焼畑農業が残っていた地域であり、サツマイモ、タロイモ、筍、島バナナやパパイヤタンカンなどが栽培されている。

畜産においては肉用牛・山羊の生産が行われて本土への出荷もされ、基幹産業に発展している。

漁業においてはトカラ伝統のホロ引き漁の他にも沿岸漁業や一本釣り漁、素潜り漁などが行われている。ホロ引き漁ではカツオ・サワラ・シビなどが、素潜り漁では伊勢海老、夜光貝、甲イカなどを漁獲しており、島民の食卓にもよく上がる。滞在中にも、宝島では夜光貝の刺身、小宝島では夜光貝の味噌漬けを頂くことができた。

4. 医療供給体制(施設、医療者、緊急時の体制、疾患の種類など)

医療については、病院がなく、各島に村立の「へき地診療所」があり、1名ずつ看護師が常勤している。また、常駐医師が鹿児島赤十字病院から3ヶ月交代で長期派遣され、中之島を拠点に上4島(口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島)の巡回診療をしている。また、下3島(悪石島、小宝島、宝島)については、中之島の常駐医師以外の鹿児島赤十字病院の医師が月2回程度巡回して住民の診療にあたっている。その他、鹿児島こども病院による小児診療や鹿児島大学による眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科、歯科など特定診療科の診療も行われている。介護については、平成24年度から宝島で「小規模多機能ホームたから」

が開所し「島民が住み慣れた島でいつまでも生活できる村づくり」を目標に、他の島への波及も目指している。小宝島の看護師 1 名は 1 ターンで移住して来られた方であり、北海道出身ということに驚いた。

歯科診療に関しては、巡回診療以外の機会としては、鹿児島市や奄美大島を訪れる際に歯科医院に受診している方が多数であった。頻回な受診が必要な場合においても、時間および費用の問題で受診出来ないというケースが見受けられた。小児では、全体的に口腔内環境が良く、歯科受診の度にフッ素塗布を行うなど予防に対する意識が高いことが伺われた。山海留学生の生徒の中には、出身地に戻ってからの治療を希望する生徒もいた。

歯科治療の種類としては、成人に対しては SPT が中心で、それに加えて歯周病の急性症状や慢性症状に対する処置、簡単な抜歯などの処置などがあった。小児に対しては、到着日に学校検診を行い、フッ素塗布やシーラント、CR 充填が治療の中心であった。

実習概要

日 付	内 容
6/19(月)	<p>23 時 フェリーとしま 2 にて鹿児島港出港</p>  <p>沢山の先生方や同級生が差し入れを持って見送りに来てくれました</p>
20(火)	<p>11 時頃 小宝島到着 民宿にて昼食の後、コミュニティセンターにて設営・診療開始</p>  <p>・写真のように、診療用のベッドを 2 台並べて、診療体制を作りました</p>



・指導医のもとで、学校検診にも参加させていただきました

21(水)

午前・午後診療



・小宝島小中学校の生徒に講和も行いました



・大学病院ではもう使われていないフィルム式デンタルX線写真の撮影・現像風景も見学させていただきました

22(木)

午前 機材撤収、宝島へ移動

午後 宝島高齢者コミュニティセンターにて設営、診療



• 宝島の壁画とこじか号

23(金)

午前・午後 診療



• 宝島では診療用ベッド一台とこじか号内の歯科用チェアを用いて診療を行いました

24(土)

午前・午後診療



• こじか号の中での診療の様子

診療後、機材片付け



• こじか号と共に記念撮影

25(日)

5時 宝島港出港

8時 平島停泊



• 停泊中に、フェリー内の医務室で平島中学校の学校歯科健診を行った

18時 鹿児島港着

振り返り記録

私が鹿児島大学歯学部に入学を希望した理由の1つとして、この離島歯科巡回診療同行実習があります。コロナ禍により、数年間は学生の参加が認められておらず、今年度が久しぶりの実施となりましたが、今回の実習に参加できたことを本当に嬉しく思います。実習関係者の皆様、および私たち学生を受け入れて下さった島民の皆様に心より感謝申し上げます。

巡回診療については、大学の講義などで知る機会はこれまでもありましたが、実際に参加してみて、とても刺激的な体験をすることができました。

まずは離島という環境についてです。私は東北地方出身で、自分が生まれ育った場所とは180°違う離島という環境にとっても魅力を感じました。正直なところ、利便性とは無縁な場所かもしれません。しかし、綺麗な海と自然に囲まれ、足りない部分はみんなで協力して補っていかうという島民の皆さんの温かい気遣いに溢れた雰囲気のある宝島・小宝島に、現代人がいつのまにか忘れてしまっている大切な物を見出す瞬間が、実習中に何度もありました。子供達を、島全体で育てていかうという考え方もとても素敵だと感じました。また、休憩時に島の様々な場所を探索しましたが、とても楽しい時間でした。

次に、離島における歯科治療についてです。口腔内環境は良好な患者さんが、今回の実習では多かったです。鹿児島大学歯学部が歯科医師を派遣して約35年経っているという中で、島民の歯科保険の改善・維持という目標に向かってきた結果であると感じました。ただ、もちろん都市部に比べると歯科診療を享受する機会は少なく、診てほしいときに診てもらえない環境であることは事実です。他の疾患でドクターヘリを呼ぶような場面でも、天候によっては離着陸できないこともあるという話を聞き、医療格差を埋める努力をする必要があると感じました。診療中に気になったのは、離島の年齢構成についてです。中学生までの子供とその親世代(30~50代)でほとんどが構成されています。実習に参加する前は診療内容として高齢者の義歯などが多いのではないかと考えていたのですが、思ったほど多くなく、驚きました。鹿児島市内や奄美大島の高齢者施設を利用する方が多いと聞きました。単身世帯や、基礎疾患を抱える高齢者にとっては、困難も多い環境であると思いました。

今回、この実習に参加して、僻地医療について考えを深める良いきっかけとなりました。機会があれば、ぜひまた参加したいと思います。